



### 國內態勢強化策發表に際して

學長 神 戸 正 雄  
法學博士

昭和十八年九月二十二日、學部に於ては入學生を迎へて新學年を開始しやうと準備しつつあつた際に、首相から國內態勢強化のラジオ放送を聽いて、一億國民の凡べてのもの、特に吾々學徒にありては洵に感激に堪へぬものがあつた。

茲に文科系學徒は徵兵猶豫の特典を停止せられ、多數のもの、學部にありては大多數の者が來る十二月一日入營することになつた。かねてから斯かることもあり得るとしては用意して居たことであり、私は其發表前に「文科系學徒のみでなく、廣く大學高等學生が

て、戦力の増強の爲めに盡さなければ濟まぬとする。

今、茲に近く入營の御召を受けやうとすることになつたのに對しては、諸君はむしろ其熱望さるる所のものが達成されたるの喜びを感じつつあることと信ずる。そして出征されたる以上は、其瞬間に神となつた大信念を固めて、敵を恐れず、敵に降らず、敵に倒されぬといふ自信を以て奮戦力闘されるであらうことも亦信じて疑はない。

そして諸君が日出度歸還されたときには、必ずや其勉強を繼續するの途が開かれて居らうし、あとの心配などは此際全くしないやうに、そして専ら前線に出て敵を撃滅することのみを念じて欲しいのである。祖國は諸君の忠誠勇武が必ず聖戦目的の達成を果して呉れることに信倚して居る。諸君は決して之に背いてはならぬのである。此御召に與り得ぬ、殘る學生諸君には又それぞれの與へられたる事情下にて最善の勉學の方法が立てられるであらうから、其に従つて靜かに勉強をつゞけて其初志を達せられたい。尤も刻下のやうな戦局の際には、勉強だけをするとは許されない。恐らく、今日までよりも重い動員令下の勤務作業に従ふことを覺悟しなければならぬ。其事あるべきを覺悟し用意しなければならぬのである。

大正十一年六月十五日創刊  
昭和十八年十月十日印刷  
昭和十八年十月十五日發行

發行人 神 戸 正 雄  
大坂市北區船場  
上三丁目十五番地  
印刷所 西大(一) 每日印刷所  
大坂市大東區海濱  
中野丁字目三番地  
發行所 關西大學學務部  
會社登録第310600号

第二一三號 國內態勢強化策發表に際して……神戸正雄(一)  
無定量・無程質……和田豐二(二)  
新刊紹介……(三)  
校 友 欄……(四)

# 無定量・無程質

教授 和田 豊 二

## 神武調

現在國民は均しく量の解決に直面してゐる。どの時代にも量ば社會の中

心問題であるが、殊に消耗戰たる現段階に於ては生産面に於て無定量が一の重要問題である。量質の學問論は別として私はこの無定量生産の要求が無程質向上を前提しなければ結局は定量生産が品質低下を招来すると考へてゐる。

扱その無定量生産は現時局の必然的要求であるから、要求者は實質上時局であり主體的には國家である。止むなき状態に基くとば言へ主體たる國家はあくまで積極面に於ける國家である。

被要求者は國民全體である。直接の聯關としては生産者たる一定國民であるが、要求自體時局の必然による國家の意思であり且總力戰たる立前からして全國民もれなく職域相應の受方をしてゐると見るべきで、聯關の直間による差別はない。されば無定量生産要求は

國民の無定量生産活動の要求である。

生産數量の無定量は生産活動の無定量である。従つて無定量生産の完遂は國民の資質技能に於て無程質向上を要請する。これが私の無定量は無程質を前提とすると言ふ所以であり、精神的肉體的乃至思想的技術的等々各方面の國民練成が叫ばれる所以である。然して該練成は國家の適切賢明なる施策指導と相俟つて國民自身の創意實踐によつて達成される。國家的社會的な厚生の施設の強調される所以である。

片愛も愛の一種であり而もその常態とさへ言へるであらう。然しその典型は相愛である。片愛は個人を完成せしめるであらう。然し全體の圓滿發展は相愛に俟たねばならぬ。國民は祖國愛に燃えて無定量生産に渾身の努力を致す。然しそれが唯それ丈に終るならば片愛である。片愛に求むるところなきは完成せる個人である。ことあげせぬ國民は無定量生産に榮譽と滿悦とを

覺える。然し無程質が伴はねば事實として定量生産品質低下を招く。全體たる國家が國民の無程質に對して賢明なる配慮を致すことにより、相愛の象徴として無定量生産は完遂され全體としての國家の發展が期せられる。かゝる量質關係は獨り國家に限らず凡ゆる團體否個人に於てさへも存する。而も半戦による區別を見ない。

事例を現實中に拾つて見よう。官吏は國體に無定量の忠勤義務を致す。國策會社は無定量生産を従業員に要求する。然して行政の簡素、權限の委譲、國民教育の徹底、育英團の設置、教員の優遇、勞務者の災害扶助、給與月額制等々は凡そ無程質を考慮した施策である。國家も會社の一方に無定量を要求しつゝ、他方に毀譽精神を昂揚し厚生施設に努力するは同時に無程質を希求してゐるのである。今日程質的向上が叫ばれ厚生法が成立する時はない。蘇つて聖職の現状は航空機の無定量生産を要求する、そのために量には量をと言ふ標語が生れてゐる。是を唯數量的に無定量には無定量と單純に解してはならない。無定量は無程質を前提

してゐるからである。歴史は自然に對する人間の征服史だと謂はれる。今無定量を數量的に解し自然に擬するならば、無定量對無定量は自然對自然である。そこでは不可能は不可能、可能は可能であり、歴史は自然史のみあつて文化史はなくなる。然るに時局は不可能を可能へと要求する。そのことは畢竟無定量が單に數量的でなく無程質を前提せねばならぬことを意味する。敵量も、無程質を内含するとせば、無定量對無定量は無程質對無程質の眞額相を呈する。故に戰勝の鍵は敵の無程質に對し常に次程高き無程質を堅持するにある。國民がこの点に確信を持つ限り徒に自爆戰況に驚愕するを要せぬ。數量的無定量は自爆戰況を常套手段とするが本來定量化の進命にあるからである。然し數量的無定量の輕視は許されぬ。そこに時間の要素を考慮に入れねばならぬからである。

漫然私は今次の事に想到する。無定量無程質の相關關係が歴史を創り人生を意義あらしめる。従つて又所謂法律轉換の鍵はその關係中にあると言へないだらうかと、

新刊紹介

ハーン著・大北次郎譯  
銀行信用の國民經濟的理論

森川 太郎

フランクフルトの銀行家アルバート・ハーン (Albert Hahn) の著作 "Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredit" が此度經濟學振興會監修の下に、大北次郎氏の手によつて完譯せられた。原著が貨幣・金融に關する第一流の文獻に屬することは、今日何人もこれを否定するものはない。實際家の筆になつた勝れたる書たる點に於て、英國の銀行頭取リーフの好著「銀行論」とよい對照であるが、理論的である點に於てはハーンが遙かに勝り、又銀行の機能について兩者の説が全く相反することも一奇と云ふべきである。尤もハーンの此書も其出版當初 (一九二〇年) は餘り世の注意を惹かず、著者をして嘆せしめたのであるが、其理論の卓拔せりと又それが傳來の學說と全く相反することに依つて、程なく學界の注目の的となり、これをめぐつて諸多の批判と論議が續出するに至つた。第三版の發刊 (一九三〇年) に際しては著者自ら其序文に於て所謂「ハーン文獻」の横溢に満足の意味を表してある程である。従つて我國に於てもハーンの説は從來引用、紹介せられてあるが、今其定本とも云ふべき第三版の邦譯に依つて、人々が此名著の全貌に一層近づき易

くなつたことは、學界の爲めに極めて有意義であると云はねばならない。

原著の理論的内容については今更多くを語る必要がないであらう。唯其概要を一言すれば、銀行信用の現象を國民經濟的觀點より考察し、銀行活動と實物經濟的諸關係 (所謂財貨界 (Güterwelt)) との交渉を闡明ならしめて、其處に透徹せる所謂銀行信用の國民經濟的理論を開いてあるのである。即ち銀行は、通説的に説かるゝ如く、公衆の餘裕資金又は貯蓄せる貨幣を受入れてこれを信用媒介的に貸出するのではなく、夫自らに對する請求權 (預金) を以て貸出するのであり、其意味に於て貸出は預金の結果ではなくして却つて其前提要件となる。斯くてハーンの根本的立場は所謂信用創造論であり、其事は原著のタイトル「ページに『銀行は貨幣を借り又貸す店舗ではなく信用の製造所である』とのマクロードの言葉を、標語として掲げてあるに見ても明瞭である。

しかし謂ふところの信用創造論者の語に依つて、ハーンを單純なるインフレーションニストと考へることは、固より誤解の甚しきものである。彼は預金の創設を意味する銀行の信用擴張を力説すると同時に、其信用擴張の限界が奈邊にあるやを論じ、又其信用擴張について自らインフレーション的信用擴張と、非インフレーション的信用擴張との區別され得ることを明示する。進んで信用供與の財貨生産に及ぼす影響を論じ、信用と物價、資

本蓄積、貯蓄、景氣變動との關係にも明晰なる分析を行つてある。其後此方面の理論に於て重要な問題となつた強制貯蓄、預金の擴張、資本形成、雇傭量の問題等が孰れも何等かの形に於て取上げられ、且つそれ等に對し的確なる考察の視角が與へられてある。其意味に於て此書は近年の貨幣金融理論の發展に對し、云はゞ著き「古典」をなすとも云ひ得るであらう。

譯者大北次郎氏は現在昭和高等商業學校教授、其金融理論に於ける深き造詣は會つて發表せられた諸論稿に依つて、既に定評のあるところである。氏は夙に原著の理論的意義を高く評價して其邦譯を志し、譯稿成つて久しくこれを筐底に藏せられたと聞く。今一層加はれる學識を以て其全體を再照、修訂し、新しくこれを世に送られたのである。名著洵に其譯者を得たと云ふべく、原著の語るところは譯者の深き理解に依つて本譯書の上には餘蘊なく再現せられてある。而も譯筆は流暢、讀んで譯文を讀むが如き滯滯を些かも感ぜしめない。卷頭に譯者に依る要領よき解説を附し、必要に應じては譯者註を附加する等、讀者に對する親切も周到であつて、茲にも亦譯者の學的良心の程が覗はれ得る。譯者の勞を多とすると共に、斯くの如き有意義の書を續々刊行せられつゝある經濟學振興會の努力に對しても、深き敬意を表し度いと思ふ。

句集「玉蟲」白川朝帆著  
句集「玉蟲」は讀岐の校友朝帆白川千代治氏の著である。ホトトギスの同人であり、讀岐の俳誌「紫苑」の主筆者である。氏が句作に精進されて數年來、その作品はこの著の數十倍數百倍にも上るであらう。その自序に云はれる通り激職の身によく諸々方々を歩いてあられる。この句集はさうした吟行によつて生れた句ばかりである。療養半年の間に、この句集を上す可く幾度か取捨擲擇された珠玉の作品である。花鳥調詠を標榜し蕉風俳句の正道をつぐホトトギス同人としてあくまで寫生句に徹しんと精進されるさまが句中隨處に見受けられる。就中、朝夕身近く接しられる讀岐路や屋島の句の中に朗詠して思はず感嘆の聲を放たしめるものが多い。入り易くして究め難いとは俳句に志す人のよく云ふことである。幾つもの峠を越え、谷を渡り尚かつその峰を究める事の至難なのが藝術である。大方の人は奥山にふみ迷ひたゞの愛好者として了はるか、幾つ目かの峠で自己満足をしてすふかである。幸ひにこの著者は病牀半歲の中にあつて靜かに自己の往く道を判然と見究めておられる。病中生死を解脱した体験が今後の句作に生かされる時、この著者も芭蕉の後に續く一人と云へやう。(B6判二八六頁 定價參圓、高松市鹽上町一八七、紫苑發行所)

學内報

卒業並に修了式

大東亞戰下第三回目的卒業式、學部第廿四卒業証書授與式は九月廿一日午前十時より千里山學舍恩賜威德館に於て、專門部第一部第十二回、第二部第五十六回卒業式は翌廿二日午前十時より天六學舍講堂において舉行した。法文學部は一三八名、經商學部は一七七名、專門部第一部二四四名、同第二部八八五名に對し神戶學長より卒業証書授與ののち、學長は苛烈なる決戦下重大なる責務を担つて校門より營門に入る學徒に激勵と慈訓の囑をなし、卒業生總代の雄々しき意氣に溢れ、負荷の大任完遂の覺悟をのべて答辭とし、自然の秀麗の學歌を齊唱して意義ある卒業式は終了した。

然して第一豫科第廿回、第二豫科第十回修了式は九月廿日午前十時より豫科講堂に於て舉行し、第一豫科六二名、第二豫科一九七名に對し修了証書を授與し、神戶學長の訓示ありて閉式した。

大學部入學式

學部入學宣誓式は十月一日午前十時より威德館に於て舉行、法文學部二〇〇名、經商學部一六〇名中の大多數は近く施行される徵兵受檢の資格者にて前線に征く決戦の入學式にて、神戶學長より

「短期間ではあるが全力を傾倒して學術の研鑽に邁進せよ」との學徒の心構へを訓示ありて、新入學生の宣誓ありて同十一時閉式した。

報國團彙報

學部・豫科 志氣塔顯彰會資金三百六十圓贈出 吹田市號飛行機獻納に金寄 園寄附 協力令に依る勤勞作業に七工場作業場に出動 貯水池掘開、學内美化清掃作業に従事。

專門部第一部 協力令に依る勤勞作業に出動 學内貯水池掘開 十月四日天六學舍より四條磯神社に參拜し京阪まで二十キロ練成行軍。

昭和十八年度

卒業・修了成績受賞者

優異賞 學部 法 大塚芳郎、菅 藤本是、經 平野喜八郎、商 上中正義、内田正

專門部第一部 法 清野壽義 第二豫科 原田好雄

優異賞 學部 政 小森秀三、經 福本憲一、八代賢、平井修、黒川康一(商) 西村時弘、石濱欣次

專門部第一部 法 金海壽、横山義弘、高柳國男(經) 中川博 專門部第二部 法 西村謙、商 大西隆志、國漢 日野強、訪萬重雄 第一豫科 目連賢一郎、上野太一郎 第二豫科 西田龍、中川岡佐美

仁保前學長逝去

本學前學長京都帝大名譽教授正三位勳二等法學博士仁保龜松先生は郷里伊賀に於て老を養つて居られたが、去る九月廿六日七十七歳の高齡を以て逝去せられた。

先生は明治廿六年東京帝國大學法科に業を卒へるや偶々我邦民法の編纂計畫あるに會し、穂積陳重博士の下にその大業に委せられ、次いで創設當時の京都帝國大學に迎へられて教授の班に列し、法學部並に民法の講座を擔當せられた。西歐に留學せられる事兩度、法學博士を授けられ、その學は斯界の權威であつた。

昭和三年停年を以て退官せられるや直ちに本學學長に就任、爾來昭和十二年本學創立五十周年祝典を機とし辭任せられる迄前後九年間、本學の經營に盡育に偉大なる足跡を印せられた。

校友

校友總會並に評議員會

昭和十八年度校友總會並に第三回評議員會は九月廿二日天六學舍に於て開催した。總會に先立ち、評議員會を午後四時半より開き、三島常任幹事司會、國民館禮の後神戶會長の挨拶あり、ついで樋口常任幹事より本年度事業並に會計報告ありて滿場一致承認し、春原澤太郎氏は委

先生は學徳一世に高く、その温容は接するものをしつれに駘蕩の思あらしめ、その郷黨に於ける慈父の如くひとしく敬慕かざるところ、十月三日郷里における本葬には遠近より參列するもの引きもきらず、本學よりは吉田理事、野村法文學部長外多數の教授職員參列し深甚の弔意を表した。

尚御遺族仁保正夫氏は三重縣阿山郡西柘植村新堂に現住される。

かくほう抄

野村、中谷、吉田、國歲教授法律學會に出席 十月五、六、七の三日間文部省における昭和十八年度日本諸學振興委員會法律學會に出席し、野村教授は「法技術としての營國金庫」と題して研究發表をなした。 中村教授 翼壯大阪府參與、思想委員に委嘱さる。

欄

員長に代つて理工科系學科設置並に學内整備問題につき特別委員會の經過報告をなし、終つて後刻開催される總會議案につき打合せをなし閉會した。

校友總會 ついで午後六時半より集會室において總會を開催、榎木常任幹事司會、國民館禮の後、神戶會長の挨拶並に現下の母校の現況について説述し、校友の相衷協力を鼓吹した。それより樋口常

任幹事の本年度事業並に會計報告あり滿場一致これを承認した。時に七時三十分東條總理大臣の國內態勢の刷新、決戦態勢の確立に關する放送を聴くため總會の議事進行を一時中止して會場を講堂に移した。會する者一同は深く感銘、益々戦

ひ抜かん覺悟を固めた。終つて總會を再開する。特別委員會委員長松木茂三郎氏より理工科系學科設置問題についての調査並に學校當局との接渉經過など詳細なる報告あり、ついで校友會評議員木下清一郎氏より理工科系學科設置決議案の提出並に説明あり、司會者より全國支部より寄せたる理工學科設置すべしとの支部決議を披瀝し、全校友の意志として講場

一致提案を可決決定し、且つ決議貫徹實行委員を會長指名に一任して急速なる實現化に邁進することになつた。茲に昨年度總會に於いて擧げられたる特別委員會は任務全く終了したるため解消することになつた。午後九時、聖壽の萬歳を奉唱し母校關西大學の將來を祝福して決戦下、有意義なる總會を盛大裡に終了散會した。

實行委員選任 總會決議貫徹の實行委員は左記の諸氏が選出された。

委員長白川朋吉、副委員長松木茂三郎、幹事木下清一郎、春原源太郎、委員阿部甚吉、井上專一郎、石原孫一、岩崎卯一、宇佐美正祐、植田完治、大川光三、岡田清作、櫻本信雄、植野泰夫、里首復二、志野覺治郎、角田好太

耶、竹井小野右衛門、巽鐵太郎、辻野新一、中川庸太郎、浪江源治、西本寛一、八島治一、樋口哲四郎、深川重義、前川信之助、三好萬次、三島律夫、森川太郎

秀麗會 (關東州支部) 第八八回例會 八月廿日午後六時より寺内通の海務協會食堂に於て開催す。集る者支部長を初め十三名相變らず和やかな雰囲気裡に定刻例によつて國民儀禮の後開會す。當夜の話題は専ら時局問題に集注せられ我々の徹底の米英撃滅に對する必勝の信念は愈々旺盛なるものがあつた。銃後國民の志氣に關しては高濱さんの徹底したる大和民族論を拜聴し次いで毛受さんとの間に於て時局下最も重要な報道機關として役割を果しつゝある新聞界の使命に就て種々と討論が續けられる等終始和氣籠々たる談笑裡に數刻を過し學歌高唱して散會したのち八時四十分であつた。

出席者：高濱、飯田、守谷、川野、秀島、毛受、松本、萩原、北條、永田、豊永、竹若、小川

朝鮮支部 第三二回神宮參拜 九月五日午前八時集合、一同參拜を終つて南山亭で休憩、席上野田幹事長より松木前支部長の御逝去に伴ふ報告並に本年度役員改選の説明があつて九時半散會した。

出席者：岡本、信田、野田、伊東、土

會員消息 專二商 赤山 一郎(4) 德島市織町一、帝國海上火災保險會社德島駐在所、有田幸三(明44) (井ヶヶ鋼管工業會社) 河原四良治(3) (發動機製造會社) 木村 正(16前) 神戸市灘區神ノ木通二ノ四六(大澤商會大阪支店) 德毛俊雄(15) 廣島縣芦品郡栗生村栗柄名越民次郎(六) 神戸市灘區上野通八ノ四 中島 政徳(14) 黑河省黑河街、滿洲拓殖公社黑河地方事務所、中橋 徳藏(3) 浪速區木津川町一ノ一 (中橋會計事務所、電話櫻川五五二五) 中村 一男(13) 神戸市林田區五番町三ノ二六 新田 利男(12) 神戸市湊區梅元町二〇六 拜郷 木(5) (ジャロジヤカルタ市日本窒素肥料會社ジャカルタ事務所) 林 貞雄(12) 藤本證券會社東京支店 松永 三郎(二〇) (帝國鑛業開發會社) 松廣 壽衛(3) 名古屋市中川區八咫町苗田二一六六

專文 高津壯太郎(7國) 蒙古自治邦政府大同教員訓練所主事 末本宣一(12英) 陸軍屬比島軍政監部、中井 安雄(7國) 東京都赤坂區一ツ木町八六 萩野 充雄(12英) 青島市貯水山路一七號六(福昌公司青島支店雜貨係)

改姓名 前田 榮一(兵庫縣揖保郡石海村長) 藤阿 英輔(17英) 吹田市二ツ池町三八、推 薦

計 香 樗木 尚典(昭14專二法) 陸軍伍長中支の野に於戦後南方に轉進中一月廿日南海に壯烈なる戦死を遂ぐ、遺族阿倍野區阪南町中六ノ二二伯父 樗木三枝殿 大橋 新三(昭17專一商) 從七位海軍中尉博多海軍航空隊に於て九月十日殉職 遺族兵庫縣明石郡大久保西島一三二三 (保護者) 下部忠平殿 衣笠 要一(昭11專一法) 去る五月廿九日アツツ島に於て散華、遺族津山市椿高下三七(父) 衣笠壽夫殿 堀月清兵衛(昭4專商) 大東亞戰に名譽の戦死をされ、九月十四日吹田第一國民學校に於て公葬が執行された。

竹本 彰(昭18大經) 九月十四日逝去 遺族廣島市中町四五(父) 竹本巖殿 錦 保一(昭16專二商) 一月六日ニユ一キニヤ戦線に於て壯烈なる戦死を遂げらる。遺族大正區三軒家檜町二ノ二一〇(父) 錦一殿 星 正之(昭16專二法) 一月廿一日南方に於て戦死

星 正之(昭16專二法) 一月廿一日南方に於て戦死

星 正之(昭16專二法) 一月廿一日南方に於て戦死

星 正之(昭16專二法) 一月廿一日南方に於て戦死

星 正之(昭16專二法) 一月廿一日南方に於て戦死

星 正之(昭16專二法) 一月廿一日南方に於て戦死

星 正之(昭16專二法) 一月廿一日南方に於て戦死















